



塩原分院

養育院の疎開

宮本孝一 老年学情報センター

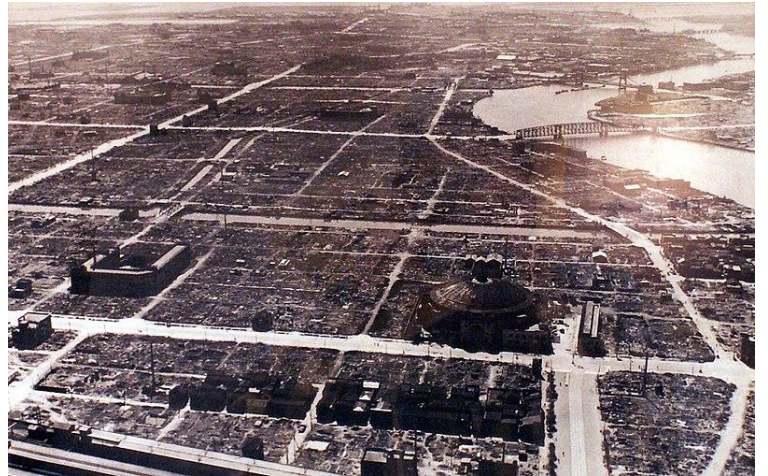
櫻園通信 78 令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

一九四四(昭和一九)年に養育院から老人の疎開が開始されました。

翌一九四五(昭和二〇)年に安房臨海学園が海軍に明け渡され、学園の児童も塩原に送られました。同年三月の東京大空襲後には本院の乳幼児が塩原に送られました。四月の空襲では石神井学園の建物が被災したため、児童の大部分を一旦本院に移し塩原に疎開することになりました。

ところが四月一三日の大空襲で養育院本院は大部分が焼失。児童は再び石神井学園に戻り、二度に分けて塩原に向かいました。

本院の機能も塩原に塩原に移すこととなり、塩原分院に庶務・保育・監護の三部が設けられました。



空襲により焦土と化した東京

両国駅付近上空から南に向かい撮影

小笠原などから強制引揚となった島民も塩原分院への収容となり、養育院の疎開者は五月には約七〇〇人に達しました。

人口三〇〇〇人の温泉町塩原は、養育院約七〇〇人を含め東京からの疎開者一万人がひしめく状態となりました。

疎開先の塩原の温泉街はもともと耕作地が少なく、養育院の食糧は外部からの配給頼みでしたが、極度に不足し

「朝は釜を洗った湯に米粒が浮いたようなおかゆ、昼はひとかけらのトウモロコシ、晩は小石大のジャガイモ何個か」という日々でした。疎開児童らは栄養失調で苦しみ、体力が著しく衰えました。

塩原分院で飢餓や病気で亡くなった収容者の記録(過去帳)が現地の寺に残されており、それによると疎開開始から一九四五(昭和二〇)年二月までの一年半に四一八人が亡くなっています。そのうち五〇歳以下は一四二人、一〇歳以下の死者は四人にのぼりました。

養育院職員と強制疎開で収容されていた小笠原諸島民は山林を開墾して畑を作りましたが、トウモロコシとジャガイモがわずかにとれただけでした。

一九四五(昭和二〇)年七月の宇都宮空襲では、県庁にあった都の疎開事務所が稼働不能になり、塩原分院への食糧供給が止まってしまいました。そのため、八月に塩原分院の死者数は最大となりました。

塩原分院は戦後に栃木分院と改称し、一九五二(昭和二七)年に閉院しました。

塩原分院(栃木分院)の開院から閉院までに五八一人の収容者が亡くなりましたが、そのうち三〇〇人超は終戦までの一年に集中しました。



塩原分院
(養育院八十年史より)

龍泉寮
宮田寮 上富士寮
常盤寮 塩釜寮

